



金高だより (第2号)

青春 (地域回覧)

〒999-5402

山形県立金山高等学校

Tel 0233-52-2887

Fax 0233-52-3575

E-mail kny-h@kaneyama

-h. ed. jp

20年度の目標、方針提示

～生徒総会・PTA総会・中高合同職員研修会～

20年度も出発したと思ったら、もう一ヶ月を過ぎてしまいました。この間、学校では今年度の取組みについて、目標や方針が提示され、それを達成するために、様々な計画を立てて、総会や研修会などに提示するほか、部活動も活発化する時期であり、大変忙しい時期でもあります。

【生徒総会】(4月24日(木))は、最近には見られなかった活発な意見交換や要望などが出され、とても立派なものでした。特に、会長はじめ執行部の緻密な仕事ぶりはもちろん、3年生の意欲的で前向きな姿勢を感じ、明るい将来が見えました。

平成20年度 前期生徒会スローガン

「IMPORTANCE IS NOW」

～ 今やるべき事を考えよう ～

私たちが金高生でいられるのは通常で3年間だけです。この貴重な時間で今、自分たちに何ができるかを考え、充実した学校生活を送りたいと思います。そこで、金高生が学校だけでなく、地域を中心となって活動することで地域の活性化を図り、そのことが私たちの誇りとなり、地域や多方面から信頼される金高を目指していくことを、私たちのスローガンとします。

【質問の様子】



【答弁の様子】



【PTA総会】(4月26日(土))では、会長(阿部直樹さん)、副会長(栗田広基さん、柿崎純一さん)他、新役員が選出されました。同時に、19年度の事業報告や20年度の事業計画も承認されました。

特に、今年度は、本校のPTA会長が最北地区高等学校PTA連合会(以下、高P連と略称)の副会長になっており、例年より事業も多くなっています。10月15日(水)には地区高P連研究集会在、金山町中央公民館で開催されます。保護者の皆様からご協力、ご支援よろしくをお願いします。

最近の部活動の活動状況報告から

5月10(土)、11日(日)の地区総体(詳しくは次号に掲載)に向けて、どの運動部も活発に練習をしています。4月25、26日にはいくつかの部の県春季大会等があり、出場した選手は健闘し、総体に向けての手ごたえを感じたようです。

○ バスケットボール(藤井高野杯)

対酒田商業戦(110:86)惜敗

○ 県春季バドミントン選手権大会

シングルス 眞見和貴

1回戦(対羽黒)勝 2回戦(対山本学院)負

○ 県春季ソフトテニス選手権大会

2回戦 栗田・須藤ペア(対山形東戦)勝

3回戦 同 ペア (対上山明新館)負

<柔道部>

選手4名、マネージャ1名の計5名が入部し、予てから念願であった柔道の復活を果たすことができました。しばらくは金中さんや地域の方々から応援や支援を受けながらの出発になります。学校では、外部コーチを委嘱し、大切に育てていく覚悟です。

<スキー部>

新入生3名加わり、春先から陸上大会や東北ブロックの強化合宿に参加するなど冬の本番に向け、精力的に取り組んでいます。伝統のスキー部の復活に期待できそうです。

<野球部>

昨夏、19年ぶりに一勝した野球部ですが部員不足で春季大会は出場できませんでした。しかし、夏の勝利を目指し、頑張っています。昨年同様、最後まで応援よろしくをお願いします。

【中高合同研修会 5月7日(水)】が、金山高校において、開かれました。第二期中高一貫教育の構築～新たな視点と創造力を生かした特色ある中高の連携の在り方～というテーマのもと、教育委員会・中高の新校長の挨拶と、各分科会において、先生方の活発な意見交換を行い、初心に戻り、結束を高めました。

本校職員室にも、暖かな春が届きました。高橋裕二君の家から、うす赤紫色でさわやかなタイワントキソウをいただきました。大事に育てます。有難うございました。



～思い出で綴る金高60年史：創立期のころ～

<思い出コーナー>創立記念日(5/10(土))

今年、創立60周年に当たります。そこで、この60年を振り返って、金山高校を支えてくれた町民の方々の想いや生徒達の活躍を中心にシリーズで掲載していきます。

今回は第1回目なので、創立期に係った方々について、特集を組んでみました。尚、この内容については、本校の13年度卒業生である、星川健君(羽場出身)がAO(自己推薦)入試の時に持参したレポート(本校ではポートフォリオと呼んでおり、これをもとに、東北公益文科大学二期生に見事、合格しました。)と過去の記念誌からの抜粋したものです。

【昭和20年～】

松沢松太郎氏らにより「勤労青年学徒連盟」を組織「町に高校」をと学徒連盟が中心となり町に署名運動を行い、町長(岸伊一郎氏)や町議会に提出した。それを、町長を先頭に、県議会に陳情、請願した。

松太郎さんの想い・・・自分たちやこれからの後輩たちのために勉強の場をつくりたかった。また、他地域から見ての教育のレベルの低さを感じ、町の将来への危機感を持ったから、町にどうしても高等学校が欲しいと思った。その運動が実って、昭和23年3月31日、高等学校設立が認可されたときの喜びはいまでも忘れることができません。

【昭和23年5月10日】

山形県立金山高等学校開校式挙行、金山中学校に併設される。(定時制課程：普通科・農業科・家庭科)翌年1月15日、新築中の校舎に移転する。

当時は、定時制でしたが、それでも学校に來れない生徒が多かったので、地域への出張授業や夜間授業を行ったそうです。そのため、創立当時から統廃合のうわさがあり、何とかしなければならぬと、先生方や生徒会役員の人たちが、中学校を卒業する人たちの家を一件一軒訪問したり、地区の座談会などでPR活動をして、生徒の勧誘に奔走していたとのこと。

【編集後記】
先日、学校便りに回覧という文字を載せて欲しいという地域の方々の要望がありました。地域の皆様には回覧していただきます。少しでも学校の様子や生徒達の活躍をお知らせできればと思います。これから、さらに工夫を重ね、努力致します。地域の方々から、様々な情報をいただければ幸いです。

【昭和31年4月1日】

全日制普通課程(定時制と併設)が設置された。

最初は定員50名からのスタートでしたが、38年には、定時制の志願者はなく、全日制課程へ79名が入学し、ほぼ現在の体制は整いました。

その間、34年には、金山高等学校校歌が制定されました。校歌の誌は、町長の岸英一氏からの依頼で戸川幸夫氏に作って頂きました。

岸英一町長(当時)の想い・・・この校歌には金山という詩は出てきません。というのは、この金山高等学校から巣立っていく生徒達は、日本人としての子どもとして育っていくんだ。金山とか山形とかという狭いところではなく、広く日本全国、そして世界に羽ばたいていく若人達になってほしいという大きな期待やあつい思いを込めてお願いし、完成したものだそうです。

鷹のように大空を駆け巡り、カモシカのように野山を駆けめぐり、鯨のように大洋を泳ぐような世界に通用するたくましい人間に育ってほしいという大きな願いが伝わってくるようです。作家の戸川幸夫氏が著した本が、本校の図書にたくさんあります。生徒の皆さんには是非読んで欲しいものです。(作曲は大宮真琴氏)



去る四月三〇日、本校に多大な功績を残された初代後援会長の須藤近内さんがご逝去なされました。謹んでお悔やみ申し上げますとともに、故人のご冥福をお祈りいたします。長い間、ご尽力ありがとうございました。

上の記念碑(町制六十周年を記念として寄贈されたもの)は、昭和五九年十一月に建立されたものです。尚、石碑に彫っている校歌の字は、故須藤近内氏のものです。

旧校舎↓(昭和23年開校) (昭和26年新校舎落成)↓

